

勇者たちの戦場

2008(平成20)年1月5日鑑賞(ユウラク座)

★★★



監督・製作・原案＝アーウィン・ウィンクラー／出演＝サムエル・L・ジャクソン／ジェシカ・ビール／ブライアン・プレスリー／カーティス・ジャクソン／チャド・マイケル・マーレイ／クリスティーナ・リッチ／ヴィクトリア・ローウェル（日活配給／2006年アメリカ映画／107分）

第1章

ハリウッド映画もいよいよ変容か？

……ベトナム戦争を描いた名作と9・11テロをテーマとした名作に続いて、遂にイラク戦争を描くハリウッド映画が登場。しかして、そのテーマは帰還した兵士たちの心のキズ……。大統領選挙に向けた1月3日のアイオワ州党員集会では劇的な変化が生まれたが、この映画はそれを象徴するもの。そんな「変化」をキーワードとし、かつ国会でのイラク給油新法の行方を見守りながら、じっくりと鑑賞したいものだ。



アイオワ州の結果が予測するものは……？

2008年1月3日に、全米トップを切って南西部のアイオワ州で実施された党員集会において、民主党は、1位オバマ、2位エドワーズ、3位クリントンと数カ月前の予想を大きく覆す結果となった。それは共和党も同じで、泡沫候補といわれていたハッカビーがトップに。この結果の分析は新聞紙上で詳しいのでここでは触れないが、2001年10月からのアフガン戦争、2003年3月からのイラク戦争を経た今日、アメリカ国民のブッシュ政権への見切りは明白になったうえ、アメリカの基本的な方向性が大きく変化しようとしていることはまちがいないようだ。

アメリカが「世界の憲兵」として君臨する時代が終わったことは明らかだが、そうかといって、かつてヨーロッパでナチスドイツが抬頭し戦雲が立ちこめていた時、「光栄ある孤立」を守っていたアメリカになってしまうとそれはそれでヤバイことも明らか。特に、それが日米安保問題にまで影響してくると、中台の軍事バランスが崩れかけようとしている今、かなりヤバイのでは……？ したがって、日本人もアメリ

カの大統領選挙の行方に十分注視する必要があるのだが……。

ハリウッド映画も大きくサマ変わり……？

ベトナム戦争の失敗を総括した1970年代後半以降、ハリウッドでは『地獄の黙示録』(79年)や『プラトーン』(86年)などベトナム戦争を題材とした名作が次々とつくられたが、近時のハリウッドの戦争映画は、『エネミー・ライン』(01年)などアメリカ讃歌のスーパーヒーロー的なテイストが目立っていた(『シネマルーム1』71頁参照)。ところが、アフガン戦争とイラク戦争の後始末がきちんとできないまま苦闘を続けているアメリカでは、近時9・11テロを描いた『ユナイテッド93』(06年)や『ワールド・トレード・センター』(06年)などが目立っていた。それに続いて、今やっとイラク戦争の問題点を描いた本作のような映画がつけられたのを見ると、ハリウッド映画のサマ変わりが明らか。

この映画は、イラク戦争から無事(?)帰還したものの、過酷な状況下で厳しい任務に耐えて戦ってきた兵士たちがみんな大きな精神上の疾患を抱えていることを生々しくアピールしたもの。その意味では、この映画はワニイシュー映画でテーマは明確だが、4人の主人公たちの心の悩みを見ていると、その深刻さがよくわかる。どんな困難な状況下でも不可能を可能にしてきた『エネミー・ライン』のようなアメリカンヒーローものがインチキだったことは、この映画をみれば明白……？

帰国直前の5人の任務の結末は……？

この映画では、軍医のウィル大佐を演ずるサミュエル・L・ジャクソンだけがビッグネームで、ヴァネッサ役の女優ジェシカ・ビールは中堅どころ……？ 他方、トミー役のブライアン・プレスリーは新人だし、ジャマール役のカーティス・ジャクソンこと50CENTのキャスティングも意外なもの。そんなキャスティングになったのは予算上の都合ではなく、新旧の俳優をバランスよく配置するため……？

それはともかく、帰国直前の彼らやトミーの親友のジョーダン(チャド・マイケル・マーレイ)らが、イラクの武装兵に襲撃されたのは不幸な偶然と言わざるをえない。その襲撃戦の激しさは是非あなた自身がスクリーンで実感してほしいが、それによってジョーダンは死亡し、ヴァネッサは右腕に重傷を、そしてトミーは足に傷を負うことに。幸運にもウィルとジャマールにはケガはなかったが、その心には大きな痛

手を伴うことに。そしてそれは、足の傷が癒えたトミーも、結果的に右腕の半分を失ったヴァネッサも同じ……。

4人の主人公 その1——ウィルは……？

この映画のテーマは明確で、ウィル以下無事(?) アメリカに帰還した4人の帰還兵たちの心の傷を描くもの。サムエール・L・ジャクソンというビッグスターを迎えたのだから、彼1人の心の悩みに焦点をあてるのも1つの方法だが、アーウィン・ウインクラー監督はそれでは多種多様な心の悩みを表現できないと考え、4人のそれをほぼ平等で紹介する方法をとった。そのため多少散漫になったきらいもあるが、それは一長一短でやむをえないもの。そこでまずは、ウィルの心の悩みを紹介すれば……。

他の3人と違って、ウィルは妻もいれば高校生の息子もいるベテラン軍医。したがって、精神的にはしっかりしているはずだし、彼自身は全くケガをしていないのだから、やっと過酷な任務から解放されてホッと一息状態……？ そうであってもおかしくないと思うのだが、ウィルはその目で見えてきたことや体験してきたことが頭から離れず、その重みは次第に深刻に。それを助長したのが、微妙な年頃の息子が、まるで父親に反抗するためであるかのように「反戦」の姿勢を明確に示し、父親に真っ向から対立してきたこと。さらに妻のペネロペ(ヴィクトリア・ローウェル)もウィルが自分1人で苦しみを抱えていることにイラ立ちを示し始め、今や家族はバラバラになる寸前。さて、そんなウィルとウィルの家族たちはどんな結末に……？

4人の主人公 その2——トミーは……？

トミーは足の傷は癒えたものの、親友のジョーダンを助けることができなかったという負い目が最大の問題点。ジョーダンの葬儀に出席し、彼の恋人サラ(クリステイナ・リッチ)にジョーダンの遺品を手渡したところまでは当然の流れだが、その後はなかなか流れをつかめず右往左往するばかり。彼の最も現実的な問題点は仕事先。予定していた仕事に就けないまま悩んでいるトミーに対して父親は厳しい言葉を投げかけてくるだけ。映画館の切符売りをやり、警察官への就職を試みていたが……。

そんなトミーにお呼び出しがかかったのは、トミー以上に精神的にボロボロになっていたジャマールが、恋人にふられた腹いせに拳銃をもって恋人が勤めるカフェに立てこもったため。ジャマールを説得するため、単身そのカフェに乗り込んでいったト

ミーだったが……？ そんなトミーの最終的な決断は、再びイラクに戻ることに。そんな悲しい選択しか現実には存在しないということを、アメリカ国民はもとより、私たち平和ボケした日本人も真剣に考える必要があるのでは……？

4人の主人公 その3——ヴァネッサは……？

米軍には女性兵士も多い。4人の主人公の1人を占める女性兵士であるシングルマザーのヴァネッサは、やっと任務を終えて子供の顔を見ることができのを楽しみしながら最後の任務に就いていた時、武装兵の襲撃に巻き込まれてしまった。車を運転していた彼女はとにかく指示されるとおり全速力で脱出を試みていたが、途中道路に仕掛けられていた爆弾により右腕を大きく負傷することに。といっても、彼女の右側に乗っていた兵士はほぼ即死状態だったのだから、右腕のケガだけですんだのはラッキー……？

そんな風に考えながら右腕には義手をつけ、やっと今彼女は高校の教員に復職することができたが……。この映画を観ていると、人間として当たり前のことが当たり前にできることがどれだけ幸せなことかを痛感するはず。それは逆にいえば、ヴァネッサにとってそれまで当然にできていたことがなぜできなくなったのかという焦りと苛立ちになるわけだが、次第にそれが人間関係にまで影響を及ぼすようになっていったから大変。恋人は彼女が義手になったからといって逃げていくわけではなく、逆にやさしく励ましてくれるのだが、今のヴァネッサはそれすら率直に受け入れることができないほど、頑なに。

4人の主人公 その4——ジャマールは……？

状況が最悪なのは黒人兵のジャマール。彼はケガもなく帰還できたのだから、ウィルと同じく超ラッキーな部類に入るはず。しかし彼は、暗がりの中で人影に発砲したところ、それが民間人の女性だったことにショックを受けていたから、かなり繊細な神経の持ち主……？ 理屈の上では「そりゃ仕方ないサ」となるわけだが、それで整理しきれないのが人間……。

そんなジャマールが今通っているのはセラピー治療。つまり、同じような悩みをもつ人たちが集まり、自由に自分の悩みや苦しみを吐き出すという治療だ。しかし、ジャマールはそこでもうまく悩みを吐き出すことができず、逆にトラブルメーカーにな

っている感じ。ヴァネッサが恋人からの温かい声を無視してしまったのと逆に、ジャマールは恋人から無視されてしまったことによってそのイライラがさらに強まり、ついにある日恋人が勤めるカフェに拳銃をもって乗り込むというバカげた行動を。

こんな評論を書いていると、1月6日の朝刊には、東京都品川区の商店街で高校2年生の少年が百円ショップで購入した包丁をふり回して通行人の男女5人を次々と切りつけ、2人に軽傷を負わせたという記事があった。調べによると、少年は率直に自供しているとのことだが、動機は「誰でもいいから皆殺しにしたかった」とのこと。この少年の日頃の鬱憤がどの程度のものなのか知らないが、少なくともイラクで過酷な任務に従事してきたこの映画の主人公たちの肉体的、精神的なそれに比べれば小さいはず。こんな風に、平和ボケが続く中で精神的に脆くなってしまった今の日本の若者たちも、こんな映画から学ぶ必要があるのでは……？

国会で上映会を開いては……？

イラク給油新法の制定のために衆議院は1月15日まで再延長されたから、法案が参議院で否決ないしみなし否決された後、衆議院の3分の2以上の多数で再議決されることはほぼ確実……？ 日本は今そんな状況にあるが、それもこれも、日本は危険なことをすべてアメリカにまかせたうえでの話。しかし、この映画の冒頭で表現される、帰国寸前のアメリカ兵たちが見舞われる襲撃シーンは迫力いっぱい。ちなみに、そこでウィルを中心とする部隊が従事していた任務は、民間人の健康診断と医薬品輸送という純粹の人道的任务。もちろんそれを看板に掲げて走っているわけではないし、仮に掲げていたとしても結果は同じだったはず。要するに、今日本の国会で議論していることの多くは、机上の空論だということだ。そんな当たり前のことに早く気づくためには、国会でこんな映画の上映会を開いてみてはどうだろうか。くだらない質疑に時間を費やすより、その方がよほど審議時間の有効活用だと私は思うのだが……。

2008(平成20)年1月7日記